
魔法使い聖夜！

ナズン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い聖夜！

【Zコード】

N8464Y

【作者名】

ナズン

【あらすじ】

ある日、俺は死んだらしい…
神に願い事を3つ叶えてもらい
そして『魔法使いネギま！』の世界に送られた
そこで俺は…

プロローグ

「え？ 『櫻・聖夜』だよー。」

起きた場所は白い空間

俺の名は『櫻・聖夜』（一七）高校生……だよな？

「あ、もうやじゅうよ

え？ 誰？

田の前に爺さんが正座で座っていた

「あ、あの誰でしょ？ 」

「ワシは神じやく」

正座で真面目な顔で言つてきた

「では、神様、俺は何でこんなとこに居るんだ？」

とりあえず、何でこんなところに居るか知りたいんだ

「死んだ、むしろワシが殺してしまった

「へ？ まあ死んだと思つてた…けど、殺した？」

「それはな…ワシがタバコを吸つてたら落としてしまって君の家が

「…」

「おま……ひど……」

「だから、責任の為、転生をさせよ!」

「へえー、どつかに送つてくれるん?」

「場所は『魔法使いネギま!』じゃ」

ネギま!と叫うと魔法か

まあ一元の世界は暇で退屈だつたからな、刺激沢山だなつ

「何か、力とかくれる?」

「そりゃーそりゃ、まつ叶えてやろ!」

それは助かる、元々のステータスが低いのだ

「1つ目、魔力無限」

どうせなら魔法を最大に使いたいのだ

「2つ目、俺のステータスマックス」

俺は運動音痴と知識が低い

「3つ目、あらゆる魔法を使える・・・後、魔法知識が欲しいんだ
が・・・」

問題があつた、魔法の制限を封じる為に、あらゆる魔法を使える力
が欲しい・・・だけど魔法知識がないんだ

「1・2・3の事をかなえよつ、だが・・・4つ目か・・・まあ、謝罪だ、叶えよつ」

爺が、何かブツブツ言つたら、力があふれてきた
マジで叶つたのかよ・・・スゲー

「さて、送るぞ、話すのが疲れてきたのじや
え?」

「ちよーまじまでー」

「ん?なんじや」

「俺を送つてくれるのは嬉しいけど、向ひでは俺ばじつなるの?」
そつ、不安なのは俺ばじつに扱いになるのかだ・・・無職?いや
だ!」

「ああーちよーじやつた、向ひでは、君は数学の飛び級先生だ

へ?先生?俺が?

「えつと・・・俺は、そんなに知識が・・・

「めんべいじやのへわかった、基本的な高校生クラスの知識を君に
送る

「やつた!」

「あー、言ひてこなさい

ちよ、態度変わった！

穴が相手落とされた

プロローグ（後書き）

次回は主人公設定を・・・

主人公設定（前書き）

サブタイトルが単純すぎ笑える

主人公設定

桜 聖夜

さくら せいや

17歳

身長 170cm

体重 65kg

性格

鈍感 気分で動く 小さい人スキ

世話役のスキ

でも面倒事ヤダ

基本的に楽しければ何でもする

人と気軽に話せる

顔は79点

痩せてる

見た目は貧弱に見える

HPといつか体力はマックス（フルマラソン余裕でクリア）

魔力無限（100年戦争できるくらい）

知識 数学高校生クラスまで暗記できる 基本的に何でも覚える（絶対暗記能力）

運動 教えてくれるなら何でもできる（天性の運動力・感）

魔法知識 何でも覚えてるし 何でも使える（チート能力）

主人公設定（後書き）

はい、チートですね

基本的に神によってチートさんになってしまいます

本人は気付いてないけど、全部の言葉も覚えてしまってます（これで、外国も余裕）

神いわく「面倒だったから全部の言葉の知識与えてしまった」

一時囲碁 ゲータウ（前書き）

基本的に、思いつきで書くため、前書きでは・・・思いつきで

今日はゲータウのつもりです

ネギまーの最初は暇ですね

1時 間 田 グータラ

ん~ いじはど~だ?

起きた場所は、電車の中・・・田の前は女ばつか・・・

何このハーレム状態

しばらくすると、突風がいきなり起きた

ああーいろんな色があるーと

・・・おっと、いじられられた、田は逸りすげ

確かネギのクシシャミか?

変態個性だな

『次は一麻帆良学園中央駅』

ああー着いたか

プシュー・・・

ドアが開く

女子がドンドンと出していく

ああー俺も降りないとな

先生は1年前から的だとうれしいな新任はヤダよ田立つからなん?後ろ姿で分るね~あれが、ネギか
でかい鞄を背負つて、小さい、外国人
分りやすいね

スピーカーか何かで急ぎましょうとか言つてる
楽しい学校だな、かなりの好み
さて、俺も走るかな、どれくらい早くなつたことやら
ネギの後ろをくつつく感じで走る

ネギめ速いな、でもかなり余裕だ、30%ぐらいでのスピードで追
いついてる

お!明田香と・・・学園長の孫娘だな、悪い、名前を忘れた・・・
おっと、頭を握られるネギ・・・笑える

おつおひ、説明してる

確か、麻帆良学園都市の中でも一番奥の女子高エリアだから、初等部にでも行け的な感じだけ?

おっと、上から誰か話しかけてきた

お、高畠だ、かなり強いんだよねー

いろいろと会ってるから、どんな魔法かだなんて知らないよ俺

ん？自己紹介か

ネギ・スプリングファイールド

うん…長い 葱だな

はいはい、驚く驚く、あー暇だねー覗きばっかりやるつもりですが
ど何か？

あ、(^ ˇ ^)、：・・・ イクシッ

うつへー下着だけ・・・しかもクマパン・・・

子供だねー

あー確かに、中学生か・・・

あ、学校内に入つてく

おつと、俺も先生だし、学園内に入るか

といつても、俺も新任らしい

高畠に見つかり、職員室で自己紹介

見たことある顔が、ちらほら

当たり障りもない挨拶をし

普通に自分の席に座る

うん、普通の職員室だなー

俺はクラス持ちじゃない

ただの科目の先生

今頃、ネギは、クラスで自己紹介で騒がれてるな

その前には明日香に注目されるね、ミスつて

俺が科目担当するのはネギのクラスだけっていう、神の力によ

なんでもありだなー神は

さて、俺の授業か

教室内に入ると、結構騒いでる

チャイムがなるとみんな席に座る

ふむ、イイネー

見たことある人ばかりだ

「えー俺が3学期間 数学を担当する 桜 聖夜 だ」

「まあ一昔の自己紹介とかは無いので、あしからず」

だって、大抵知ってるもの、あ、孫娘の名前は木乃香なんだ、へえー

んで、授業内容は、適当にやつた

んで、俺は職員室で寝た

退屈なもの

・・・ん~暇だ

俺は起きて、ネギを探した、主人公だし、そろそろ あれが起きる
はず

あーやつぱり

のどか だ

後半は重要な人物

あー魔法使いやがった、のどかが落ちそうになつたから、まつ、い
い奴だな

明日香にみられて、問いただされるね

さて、俺は

「おー、大丈夫か?」

「え? あ・・・はい」

「ふむ、怪我は、ないな」

「・・・」

無口だねー、まつ、最初だし

俺は、落ちてる本を拾い、のどかに渡す

「ん、半分持つてやる」

「え? ・・・でも」

黙つて頷く

「気にするな、あんな事があつたのに反省しないつもりか?」

「図書室までだよな・・・俺、場所分かんない

「つひをジーっとみられた

「あー後ろついてくから」

のどかは、黙つて前を歩いてく

そして、図書館につき、何やら用事があるついで、頭を下げて、さつと出でく

「んーでかいな、図書館」

あー俺も、パーティー行くかな

俺も走つて教室に行く

教室に入り

「ネギ先生？」

「あ、えっと」

「私は新任で、数学の先生をしてる 桜 聖夜 と言います
いやー、新任で子供先生がいると聞いて、仲良くなれたらなーって
思いまして」

「ああーーーはーーーこちらこそ、僕は ネギ・スプリングフィールド
です」

と挨拶してると

「やあネギ君・・・と聖夜君、初日の授業、共にお疲れ様だつたね」

「あ タカミチとしづな先生まで」

「いえ、初日なんで大丈夫でした」

「へ、ふ、う」

?

振り向くと明日香がネギの襟首を持ち話しかけてる

あー読心術か

ネギが高畠先生に近づき

「アスナさんのことばっかり通つてん?」

おこおい、直球だな、さすが子供

明日香も泣いてる

2往復すると明日香が出て行つた

あーネギのカツコイイシーンか

「こやー明日香さんはバイトしながら通つてるとですか」

高畠先生と適当に話す

「ああ、そうだよ、でも明るくて、いい子だよ」

んー気になつたから、見に行くかな

廊下を出て歩いてると、・・・あのシーンだ

子供先生が「クラレテルって思つてしまふシーン

笑える

あ、俺が泊る場所つて・・・

1時間目 グータラ（後書き）

はい、適当に書いてます

すみません、すみません、すみません

ほぼ丸パクリ

だつて…どうしろと、介入できんよ 最初だし

介入したらネギの人生終わる

2時間目 ヒーマニアマー（前書き）

はい、今回もストーカーします

退屈ですもの、少し介入するかも

2時間目　ヒーマペーパー

俺は起きると木々の中

野宿ですけど何か？

だつて、カネナイシ、学長にでも話そうかなー、面倒

んで、授業

ガラガ・・・

パシッ

「上にあつた黒板消しを止める」

チツ

舌打ちが聞こえたぞ、おい

「起立ー」

のどかが、口直か

「さて、2時間目だ、26ページを開け」

ほとんどの人は聞く、まあーさぼり組は知らん

「えー、んで、じつなって、あーなる」

「さて、問い合わせの問題だが・・・誰かにやつしもひづか

トイ

トイ

皆、田を逸らすなよ、当たたくながだら。

「んじゅーのどか、解け」

「あ、はい」

「ん、正解だ」

キーンゴーンカーボン

「ん、終わりか、終了だ」

俺は、さつあと教室を出る

「あ、あの」

廊下で、のびかに声をかけられる

「なんだ、のどか、授業で解らん事でもあつたか？」

「・・・あの桜先生」

「ん？お前、昨日と髪型が違つた」

と言つても知つてゐるだけじね、変なところは覚えてるんだ

「え、変ですか？」

「いや、むしろ似合つてる、可愛いな・・・おっとダメだな先生が
そんなこと無いな」と

とこつても本音をよく出しちゃうのがあるんだよ、俺

困つたもんだ

と、そんなこと思つてたら のどか がいなくなつてた

「「「ネギ先生ーーー」」

あ、そつかホレ薬だつけ、怖い怖い

俺は、図書室に向かつ

「・・・あー圧し掛かつてゐる」

「くつ、桜先生ー見てないで助けてください」

「やれやれ、ネギ先生、乙女の純情な気持ちを・・・って、そんな

「…」
「…」

俺は、のどか の襟首を持ち引き剥がした

そしてそのまま扉の横に回避

「何をやつとるかー…！」

これが来るからね

扉を吹っ飛ばす脚力怖い怖い

「ア アスナさん…？」

「あ、桜先生…！」

「怖いな、明日香さん」

「え、あ、すみません」

「ふう、まあいい のどかは寝かせてある、後始末はなんとかしな

俺はここから立ち去る、面倒はヤダよ

あ、俺の住むところ…・・・ビルじょ

2章 第二回 ハーマイオニー（後書き）

はい、今回は 少し介入しました

こんな感じで書いていこうと思います

だんだんネギ達に介入していくよ

序盤を壊すと後が詰まる

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん（前書き）

3時間目は女子寮侵入しようとしたけどヤメタ
てなわけで4時間目 聖夜も少し介入するよ

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん

朝早く起きてしまった・・・

すこし見回るか

ん?

明日香か・・・浮いてるのはネギか

もひつ堂々と魔法見してるねー

・・・もひつと眠り

職員室なう

教室なう

「居残り授業ですか?」

「あ、桜先生」

「俺も見して貰おうかな、俺一様何でもできるから」

「桜先生って英語もできるですか!」

「できるゼー
んで、小テストか」

「はー、じゃあまずこれから〇点満点の小テストをしますので
6点以上とれるまで帰つたりやダメです」

「ふむふむ（簡単すぎた）」

「できましたです」

「ん、夕映か、ドレドレ」

「ふむ、9点だ 合格だ・・・ていうか頭いいじゃないか

「勉強キレイなんですね」

「あー解る、俺も嫌いだったからな、ちゃんと勉強しないよ

「ヤダです」

「いや、嘘でもいいから〇Kしちゃ

「できたアルホー

「ん? 次はクーか」

「そつアル

「・・・4点・・・やつなおしだ」

しまいく
へひりく

「先生できたアルー」

「ん、クー8点だ、合格、よくせつた」

「ワタシ日本語勉強だけで精一杯なのアルよ」

「と言つと、普通だつたら合格できるな、なら大丈夫だ」

「さよづなりアルよー」

軽く手を振る

「後は明日香か、心弱つてゐるねー

「おーい調子はどうだいネギ君

「おつと聖夜君もいたのか

「お手伝いだ

「感心するねー おつ、やっぱ例によつてアスナ君か
あんまりネギ君と聖夜君を困らせちゃダメだぞーアスナ君

んで、逃げ出した

俺は、去るかな、後はネギが何とかするはずだ

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん（後書き）

はい、だんだんと慣れたけど、こんな感じでいいのかな～？って疑
間に思つ

7・8・9・10時間目 もあー冒険の始まりだ！（前書き）

もあーどんづん介入してください！

てなわけど大作戦にも参加しちゃいます

7・8・9・10時間目 わあー冒険の始まりだ！

昨日、学園長に呼び出された

話の内容は、期末テストの問題作成・・・いや新任の俺に任せること
そうかー期末テストか・・・探検に出るねーあいつら・・・俺もつ
いていくかな

問題作成は、もう終わらせといった

あー林の中で魔法封印してるネギだ・・・

さて、図書館か

集まってるね

「おい、ネギ先生達何してんのだ？」

「 「 「 「 「 「 桜先生！」」」」」」」

「大方、探検か？」

「あ、いえ、はい

「そつアル」

一部があつたり答える

「イイネー俺も付き合つぜ」

גָּמְנִי — . . . גָּמְנִי גָּמְנִי גָּמְנִי

「楽しそうなこと好きだからな」

（桜先生の事少しわからぬいや）」

ネギが何か考へてる

夕映が1□1□と説明していく

扉をあけると

「わーっ！？本がいりぱにホントにスケイぞ！」

本が炭酸ある部屋に出た
そこへ迈に本棚だ

「J.J.が図書館島地下3階・・・私たち中学生が入つていいのはこ
こまでです」

ネギがハシャイデル

子供だな

ジョンソン

弓が飛んでくる

ガシツ

「うひやー!？」

楓が『』をキャッチ

さすが忍びだな

お皿当てのものが『魔法の本』だ

何かいろいろ話してたけど無視無視

「では出発ですかー。」

「　　「　　「　　「　　「　　「

しばらく歩いてると

まき絵が落ちついになつたけどボンボンセーフ

す!』に身体能力だ

次にネギに向かつて本棚が落ちてくる

クーが飛び蹴り

楓が本キャッチ

本当に、あいつらの運動神経スゴイな

パートナーになつてほしいねー

ネギがドジっ子中

明日香がホロー

もつ付き合つちまえよ

田の前でイチャイチャしゃがつて

しづらへると弁当を食べるこになつた

にしても、この図書館本当にでかいな

さすが図書館島つて事だけはある

んで、しづらへ歩き、狭い通路を通ると

広間に出了

あ、メルキセデクの書さんチィース

ネギが騒いでる、ちよつと煩いよ

バカ組が本を取ろうと走り、ツイスターゲームへ

学長の趣味だな、本当にパンチラ多いねー

最終問題でお猿・・・『り』と『る』を間違えるなよ・・・

床破壊された・・・って

「ちよーーー！」

「　「　「キヤアアアー」」

まあ一下は水あるから大丈夫だけどね

ザツパ——ン

「あれ・・・?」「・・・？」

「・・・や そうだ 僕たち英単語のトラップを間違えて、『一レ
ムに落とされちゃったんだ』

「つて」

「　「　「」が「」なの~!~!」

「どう見ても地下だな、ネギ先生」

「桜先生、僕達助かるのでしょつか」

「ん~、助かるでしょ、ダンジョンには隠し扉とかあるのは定番だ
し」

「ロードダンジョンなんですか」

「いや、違うでしょ」

「痛つ・・・」

「アスナさん!~?」

じつめに明日香は怪我をしたらしく

ネギは杖を持ち手をかざし

「ラス・テルマ・スキル・・

ネギよ・・・お前魔法封印してるだろ

「（ハツ・・・・）」

気がついたよ、うで・・・

ネギは担任として、みんなを励ましてる

つて、こんな状況で授業かよ！

て言つた、テキストもトイレもキッチンも食料も・・・

都合がよろしくて・・・

んで、暫くして

「誰か助けてーッ」

まき絵え・・不幸な少女よ

ゴーレムに掴まれた まき絵

あ一旨タオル一枚。俺は観戦でもしますか

ネギが魔法を唱えた・・・でも封印があるから打てない・・・ドジっ子ネギ・・・

といふか明日香以外の知らない生徒にバレルゾ・・・まあバカ組だから解るはずもなく

学長も手助けの声

ネギがドンドン暴露

クーと楓のコンビネーションにより まき絵 救出

その まき絵 のリボン技術で魔法の本ゲット

逃げる生徒たち・・・俺放置・・・orz

だつて、まだ馴染んでないんだもん

はあ、そうだ、俺・・・始動キーなんだらう

魔法を唱える為には始動キーという魔法を放つための暗証番号的なものがいるらしい

教えてもらひってない・・・適当に唱えてみるか

誰もいないことだし

適当にあさつての方向に向いて、杖?はないよ、人差し指を立てて

「光の精靈1柱……『魔法の射手・連弾・光の1矢』」

ウンデトリーギンタ・スピリトゥス・ルーキス……サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス

›魔法の射手への光版。白い弾を相手に撃つ。

光の球ができ、それが、指をさした方向に飛んでいく

バーンツ

本棚にあたって、本棚が倒れた

おお、始動キーいらないの……スゲー

間違えて撃つてしまいそう怖いじゃないか

おっと、そろそろ脱出してるかな

・・・うええええ、螺旋階段を歩く

あ、ゴーレムだ

「学園長……何やつてるんですか？」

「おお、その声は聖夜君か、よくワシだと解ったの」

「声で解りますよ、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃ、ワシは丈夫だからのう」

「わい、俺は、わいつらと戻りますか」

「わいじや、聖夜君」

「なんですか?」

「君……魔法使いじゃろ」

「……なぜ?」

バレることでないのに

「君の態度で解つたのだ、『一レーム』と判つても驚かないし、余裕そ
うな顔だからのわ」

「……わいですか……俺は魔法使いですよ、一様……」

・・・あー追いでられるかなー、追いでられたら暴れてやる・・・

「認めるんじやな・・・ネギ君の面倒を見てくれると嬉しきじやが、
危なつかしい子でのわ」

「あれ? 追い出さないんですか? 知らない魔法使いなんて・・・危
ないでしょ」

「フォフォ、君の眼は腐つてないからのう、なぜか信用もできるで
のわ」

「嬉しいですね、俺もネギ君は好きですから、もちろん友達として

「では頼もう、じつかり面倒を見てくれ」

「もちろん陰で……ですね？」

「それでよからへ」

よし、学園長にバレてしまつたが、追い出されなかつた、そしてネギの面倒が見れる……

自分に都合がいい方向に動くだなんて……これが神の力か……

7・8・9・10時間目 タタ一冒険の始まりだ！（後書き）

・・・はい、ネギ君の面倒が見れるようになりました

学園長に魔法使いとばれる・・・といつ事を先にしとく」とで

のちの展開が楽になります

なんつう都合がいい方向に持っていく

怖い怖い

26時間目 26時間目は長い授業だな

「ふあー、いやあーよく寝たなー・・・はじめてこんなに気持ち良く寝たぜー」

「ああーうかい、早く出でけ」

起きると、H・V・Aが椅子に座つてコーヒーを飲んでた

「聖夜先生、おはよひ〜れます、コーヒー飲みますか?」

「ああー頼む」

「H・V・A、朝飯は?」

「なんで貴様なんかに朝飯なんて作らないといけないのだ

「ちえ」

「聖夜先生」

「茶々丸、学校じゃないから聖夜さんで構わん」

「ですが「聖夜さんでいい」」

「判りました、聖夜さんパンはありますけど食べますか?」

「ああー食べる」

「んで貴様はいつまで、いるつもりだ?」

「俺の気分次第」

「・・・とこいつすうじとこぬつもりかあああああーーー！」

「おお怖い怖い、気分つて言つただろ、大体俺は、ネギの監視とい
うかモグモグお守があるから、大抵は外だモグモグ、パンうめえー」

「お守とこいと何かがあるのか」

「まあ、俺は学園長に言われただけ」

「そうか、私は出掛けのぞ」

「いつてうー、あ、合鍵なら学園長からもらつたから安心しゆよー」

「返せ！？」

「断る！！」

暫くすると、エヴァが帰ってきた、ずいぶん嬉しそうだな、あー
サウザンドマスターが生きてるって聞いたから

「エヴァ、ずいぶん嬉しそうだな、いい事でもあつたか?」

「何でもない」

「そりか、フフ」

「何を笑つてゐんだ貴様は」

「いや、ヒビアの嬉しい顔を見たら、なんかこいつまで嬉しくなつた」

「むつ」

「うん、愉快だ、俺も愉快だぜ」

「ふんつー。」

「マスター照れてる」

「茶々丸ーお前はいつも煙らん事を言ひ

「マスター照れ隠し」

「エ、ガア、かわいいな」

「なつ、貴様ー出でけー」「ブンッ

「ちよ、物を投げるな」

「ブンッ、ブンッ

「あー判つた判つた、今日は出でくからー」

ガチャン

「はあー今日は野宿か」

ん～そういうえば、修学旅行編がそろそろか・・・

俺はエヴァと一緒にしばらく楽しむかな・・・

あ、石にされるとこは助けてあげたいけど・・・いじつますのは止め
くないよな・・・眠い

寝よう

26時間目 26時間目ついでに授業だな（後書き）

といつても、その日までカットしますけどねー。

45話 もう少し楽しもうか

今日は少し暴れるかな~

んー修学旅行の日を送ってるネギ・・・だけど今日は暴られる所
だっけな

俺は学園長とエヴァが囮暮してゐる所にいる

ん?連絡來たな

「今すぐそこへ急行できる人材は・・・ほー。」

「ん?何だジジィマヌケヅリコレ

「レーハちもか・・・」

「君たちに西の本山に行つてほしーのだ

「ふーん(知つてたナビ)」

「いけるのかー!?

「あ、エヴァと一緒に行けるのかー!」

「セウジヤのー」

「学園から出れると言つただろおが！？やつぱり駄田とせ
「つづく修学旅行も学業の一環じゃし短時間なら呪いの精靈をだ
まくらかせると思つたんぢゃがの～」

「ナギの奴め力任せに術をかけるけおつてからこ・・・」

「・・・正直無理かも テヘッ」

「てへ、じやない！－何とかしぃじじじ…－…殴るぞー！？」

「マスターそんなに熱心になつて」

「よほど聖夜さんと出掛けたいんですね・・・」

「誰・が・聖夜と行きたいだなんて～」

「私はただ出掛けたいだけで・・・」

「ええい まいてやる まいてやる ここのボケロボツ カリカリカリ

「あああ いけません そんなにまいては・・・」

「あー早く一緒に行きたいなー」

ん？エヴァが何かやつてるな

あーネギ達に話しているのか・・・

そーつて楽しもうか少しだけだけど

「ウチのぼーやが世話になつたようだな 若造」

変な人形さんの腕を掴んでパンチ

吹つ飛ぶ・・・あーさすがだぜエヴァ

「エヴァ、俺の力を見せてやろつ」

「桜先生!?」

「フフフ、見してみる、ダメだつたら追い出してやる」

「それは困る、んじや・・・お前の魔法を出してやろつ!..」

「なにつ!..」

「パクッてやろつ!..」

「来たれ氷精、大氣に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を・・・『凍
る大地』」

「契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえの闇。永遠の氷河。全ての命あるものに等しき死を。其は、安らぎ也。『終わる

「ふん、弱いな、ただの『テカイだけのモンスターだな。ハーハッハ
ツハ』

「つつつ 次から次へとなんや何なんやー」

変なメガネ女が何言つてる

「運が悪かつたな、この俺の友達に手を出すとかな」

「俺の名は桜 聖夜 あらゆる魔法を使える男だ！」

あ、やべ少し 言つてしまつた

「さあー終わらせようじやないか

「全ての命ある者に等しき死を 其は安らぎ也」

「”おわるせかい”碎けな」パチンッ

「粉碎 玉碎 大喝采 アーッハッハッハ」

「す、すごいな聖夜、本当に私の魔法を使えるだなんてな、何者なんだ・・・」

「俺は桜 聖夜 それだけだ・・・といつか覚えてない」

「や やつた!-す』ーい 桜先生

「どうだ、俺の力は」

「すういです 桜先生 そんなに強いだなんて」

「ま、まあ私のほうがすういけどな」

「やつだねーエヴァ」ナイトナイト

「やめる、聖夜」

バシ

「エヴァさんもありがとうございます
でも、登校地獄の呪いは？」

「あ そーゆ 学園の外に出られないんじゃなかつたの？」

「それですが・・・」

茶々丸が説明

「今回の報酬として明日 私達が京都観光終えるまで じじいには
ハン口地獄を続けて貰う
こんな機会もうないからなー。」

「今回の件でイイものが見れたしな、少しあつこよかつたぞ聖夜」

「・・・テレた・・・」

「す、少しだけだ！」

「マスターが『デレましたね』

「茶・々・丸！…」

カリカリカリ

「ああーいけませんマスターそんなに巻いては」

「仲がいいですね 三人とも」

おっとそろそろ不意打ちが来るな

「エヴァンジエリンさん…！」

「障壁突破”石の槍”」

「バカ どけつ」ドンッ

「あつ」

ドギッ

戦う時フルボツコ確定だな

「がつ・・・ぐ・・・貴様つ・・・」

「エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル」

「『人形使い』か・・・」

アリス？んな訳がないな

「エヴァンジエリンさん…！」

「エヴァちゃん」

「フ…」

ボウン

ザアアア

ザツ

「そのとおり」

「『不死の魔法使い』さ」

ボツ

ズシャアアツ

「…なるほど 相手が吸血鬼の神祖では部が悪い

「今日の所は僕も退く事にするよ」

んー俺無視かー悲しいな

「逃げたか」

「マスター御無事で」

「H エヴァちゃん いい 今のつて」

「ほら、エヴァ ハンカチで拭けよ」

「うむ・・・ありがとう 今のガキも人間ではないな 動きに人工的なものを感じた 人形あるいは・・・」「どこの手の者かはわからんがな・・・まあ安心しろ修学旅行中は聖夜と私がついてる」

「じゃなくて 今 岩がグサ~て血がドバーって」

言い方・・・

「ん?ああ 吸血鬼 特に神祖は、ただの剣や銃で死なん映画とかであるだろ」

「再生は疲れるしメンドいからキライなんだが」

「よかつた・・・エヴァンジョンさん」

「う・・」

「あ!」

「ん?」

ドサアッ

「ビ ビビ ビウヒたぼーやーー?」

「ネギ先生ー?」

「ネギちゃんちゅうじゅうじゅう」と

「兄貴つ ひでえつ 右半身が石化を・・・

「(治せるけど面倒・・・って) とか助けてくるだろ、あいつらが)

」

「ネギくーん」

「ネギ先生」

大抵の人が集合してきた

「ビ、ビビにかならないのエヴァちゃん、桜先生!ー!」

「ん一回復はちょっと(面倒)」

「わっ・・・わわ私は治癒魔法は苦手なんだよ 不死身だから」 オ

ロオロ

やつばオロオロしてる姿可愛いな・・・抱きしめたくなる

や一つて仮契約か・・・頑張れ 木乃香

「!」 このかせん?」

「よかつた 無事だつたんですね・・・」

「なあーエヴァ あいつの方は・・・」「ヒソヒソ

「大丈夫だ、手はまわしてある」「ヒソヒソ

あの人形もカワイイと思つてしまつ自分が怖いな。

朝

エヴァと刹那の会話を横で聞いて刹那が去りうとする

ネギが止める

その様子を俺とエヴァは茶々丸のお茶を飲みながらマッタリタイム

「若じつていいよなー」

「いや、お前は見たぜ」

グーパンを食らつた

んー3・Aの女たちが慌ただしく出てくる

イイハナシダナー終了

暫くタツテ

俺とエヴァ達はネギ達を無理やり連れ出し観光

長との集合場所に・・・

「マスター満足行きましたか」

「うむ いった」

「（んーいい笑顔だ）」

ちょっとシリアルの話を聞き

ネギのお父さんの昔使つてた部屋に案内された

そしてネギのお父さんの話を聞いた、まあ一知ってるけど

記念写真と言われたが俺は長と同じく上に

今思つたが学園長・・・死んじやつたかな？

45話 わあー少し楽しもつか（後書き）

はい、初戦では、エヴァの物まねをしました

エヴァが聖夜の呼び方・・・

ええー名前を呼び捨てです

聖夜つてロリコン

いえ、ロリコンというよりは小さい人が好きなだけです
けっしてロリコンでは・・・

なぜエヴァが刺される時、助けなかつた

信頼してるからでしょう、しないって・・・

でも覚えてなかつたら助けてますね

でも、あの人は、次に聖夜にあつたらフルボッコされるかもしれません

せん

54時 間田 弟子のHiroに会つてしまひ

「へあー口羅日かー」

「おはよひゞやこます、聖夜さん」

「んーおはー茶々丸、Hウアは?」

「マスターなら寝てますよ」

「ほお、これはイタズラ?・・・チャンス?」

Hウアのベットの横に座り、顔をのぞいてみる

「気持ち良さそうに寝てるな~」

ツン

「ん~」

ツンツン

「むう~ハムツ」 チュー

「お、指先を噛まれチューちゅーしだした

」「クガク

「・・・」

「つま」

「聖夜さん」

「つあ、なんだ」

「そりそりマスターを起しますので」

「あーー わかった」

「下に降りてゐる」

「はい」

暫くして

「んあ～おはよつ 聖夜、クシユン」

「おはよつ ハヴァ・・・花粉症か?」

「ああ、そうなんだ、クシユン」

「大変だな」

「ンンン

「密か・・・」

茶々丸が外に出る

入ってきたのは ネギと明日香だ

「桜 聖夜さん、僕を弟子にしてください」

「は？俺の弟子にだと？」

「無理、学ぶならエヴァーにしてけ

「あなたの京都の戦いで魔法の戦い方を学ぶなら聖夜さんしかいな
いと！」

「残念ながら俺は、自分の記憶が一部失ってるんだ（嘘だけど）、
戦い方など体が勝手に動くだけだ（嘘だけど）、何よりもエヴァーの方
が魔法は詳しい」

「聖夜・・・お前、私を高く評価してるんだな

（倒事の回収とか）

「そりやー魔法技術とか、エヴァーの方がウマイと思つてゐよ」（面
倒事の回収とか）

「判りました：聖夜さんがそこまで進めるなら・・・エヴァンジエ
リンさんお願ひします」

「聖夜が勧めてくれたんだ、判つた、だが代償が必要だぞ・・・

「まずは足をなめろ」

「話が下部として永遠の忠誠を誓え話はそれからだ」

「アホかーっ」

明日香のハリセンがエヴァを叩いた

あー痛そうだね

必至だねー

確か、ホレチヨ「食つたんだっけな・・・

さて、今度の土曜日、もう一度来てもらいテストするんだっけな

ネギ達が帰った

「聖夜、なぜ私を進めた」

「ん?なぜって言つたとおりだぞ

「貴様が教えた方がよかつたんじゃない?」

「何を言う、確かに京都での戦いでパクれる技術と魔法力をを見せた
が・・・あくまでもパクリだ、
それに・・・お前の昔の技・・・」

「なんだ?聞こえんぞ?」

「まつ、お前はネギを受け入れた、俺は教えるほど説明がつまく
ない、先生には向いてない
以上だ」

「ハブらかされた気分だ」

「ま、撫でてやるから」ナデナデ

「む」

「マスター濡れてる」

「茶々丸ーーー！」

ずいぶんと慣れたなーこの環境

最初は出てけ出てけ と煩かったのにな

暫く

ある日の早朝

「んー早朝散歩つていいものだねー」

「ああ、悪くない

ん?あれは、ネギとまき詰め? つて、あー焼きもひかへとか

「ふん・・・カンフーか

「ずいぶん熱心じゃないか、ぼーちゃん」

「あれー？エヴァちゃん茶々丸さんに桜先生おはよー」

「あ もはよひびきますーお仕事ですか？」

「セツチの修行をすることにしたのか？」

「じゃあ 私への弟子入りの件は白紙とこいつ」とでございんだな「むすつ・・・

あー不機嫌になつた・・・焼き餅食いたいくなつた

「ええつー・?」

「（あれー 「わせ」・・・?）」

言い訳するネギ

理由を聞く

まき絵

「じやあな ま 子供にはカンフーじゅうじゅ、お似合いだよ

「あつ・・・待つてくださいーー！」

「聖夜さんが、せつかくマスターを勧めてくれたのにカンフーを必死に学んでるのでヤダつたんですか？マスター？」

「なつ・・・ち ちがつわつー

「ん？どうしたんだエヴァー？」

「な なんでもないわつ！」

変なエヴァアだな

「ちょっと一エヴァアちゃん何でネギ君にイジワルするのー？弟子にしてあげればーーのに 何のでしか知らないけど」

「聖夜さん気持ちを踏みいじつたのが嫌なそつです」

「へ？」

「ソンナ二氣二入ッテンノカセイヤノコト」

「ちがうつひーのコト」

「茶々丸を揺らそうとするエヴァア

「フン 子供の遊びに付き合つ趣味は無いんだよ」

「お前みたいな子供っぽい奴と話すのもな佐々木まき絵

あー怒ったね、まき絵さん

んでテスト内容が決まったそつです

カンフーで茶々丸に一撃入れること・・・茶々丸かわいそつだなー

まあ強いからねー茶々丸

んで、ふつ飛ばされひゅうつネギ・・・あ、ごめん可愛いのはネギ君だ

んで土曜日だ

「んーそろそろかー」

「オイ 御主人コレジヤ試合ガ見エネーゾ」

「モツトイイ位置ニ一座ラセロヤ」

「ん、チヤチヤゼロ、俺と一緒に見るか?」

「ソレデ構ワネー」

「ん

「ケケケ」

チヤチヤゼロを俺の頭の上に載せた

「しかし良いのですか聖夜さんとマスター」

「ネギ先生が私に一撃を引くえる確率は概算約3%以下・・・」

「ネギ先生が合格できなければ聖夜さんとマスターとしても不本意なのは・・・」

「大丈夫だ、一撃決めるよネギは」

「勘違いするなよ茶々丸、私は聖夜が勧めたから弟子をとつてやろうと」

「それに一撃当てれば合格などとは破格の条件だ、これでダメなら、ぼーやが悪い」

「いいな茶々丸手を抜いたりするなよ」

「ハ・・・ア解しました」

「まあー大丈夫だと思つけどね」

「そろそろ時間か・・・」

「エヴァンジエリンちゃん」

「来たね~」

さて、俺はイスに座つて観戦観戦

「チャチャゼロは俺の膝の上な」

「ワカツタゼ聖夜」

「ネギ・スプリングフィールド弟子入りテストを受けに来ました」

「よく来たなぼーや」

「では早速始めよつか

にしても、ギャラリー沢山だなー人氣者めが

「では始めるがいい！…！」

「始まつたねー」

んー最初は良い感じだな

「ふん・・・我流の自分への魔力供給か

「んでも、一日程度じゃどうにもなんないね技術差で」

お、ふら付いた

誘いだ

でも、相手を誰だと思つてんだ・・・

あーカウンター食らつた

「・・・チツ（この程度か）」

「ふん・・・まあ そんな所だろ？」

「ゴキゲン ナナメダナ御主人」

「残念だつたな ぼーや だが、それが貴様の器だ」

「顔を洗つて出直してこよ」

「おいおこ、ヒューハ、余りネギを舐めない方がいいぞ」

「聖夜、じつにうじだ」

「見てみな

「まだです・・・まだ僕くたばつてませんよ ヒューハンジヒーリングセ

ン」

「お前の出した条件は、くたばるまで だ・・・それが仇になつた
なヒューハ」

「な・・・何つー?まさか貴様・・・」

「たぶん、当てるまでもあきらめない・・・まつ、限界まで見して貰
おつかな」

「んー根性あるねーネギ君

「ぼーあ もう いいだろ いくら防御に魔力を集中しても限度が
ある

「エガア、見てるしかないよ、あきらめないからねギ君は・・・」

「ううーしかしだな」

明田香が止めようとしたけど
まき絵が必死に食い止めた

「若いねー」

「これが、若さか・・・」

あ、茶々丸・・・

「オイ茶々丸！――」

「え？」

ペチン

「・・・あ

「な

「フフ、当たつたな

「う・・・あ・・・あれ?」

「ぼ・・・僕? テストは?」

「合格だぜ、ネギ君、おめでとう」

「・・・ふん負けたよ、ぼーや」

「『機嫌だね、エヴァ』」

「フン、条件が違つてたら落ちてたさ」

「テレヲカクシテルナ御主人」

「フフ、頑張つて教えてやれよエヴァ」

54 時間田 弟子入りまでキタネー

オリジナルって思いつかないから困る

やつと弟子入りまでキタネー

60時間目 カードをドロー

エヴァが初弟子と仮契約の4人と練習らしいです
ネギ

「よし では始める」

「契約執行180秒間」

「3分か・・・」

「よし次だ 対物・魔法障壁 全方位 全力展開！」

「ハイ！」

「一次 対魔・魔法障壁 全力展開！」

「ハイ！」

んで、3分持ちこたえての射手199本

それを放つたらネギが倒れてしまった

少し休憩した後、何やらネギがエヴァと話をしてたら、ネギが殴られた

「なあー エヴァ 何話してたんだ？」

「ん？ああドリームをこいつ倒せるかって言われた

「ドリーム……あ（あれ）のか」

「聖夜は知ってるのか」

「いーや しらなーい」

明日香がネギを吹っ飛ばした後

「ぼーやと近衛木乃香 お前たちには話がある
『帰りはウチに寄つていけ』

「え……」

エヴァの家ナウ

「なあー茶々丸」

「なんでしうが、聖夜さん」

「エヴァって田が悪かつたけ？」

「いえ、あれは伊達メガネです」

「うーん、似合つてるね」

「聖夜さんはメガネある方が好きですか？」

「いや、裸眼の方が好きだな」

「そう、ですか」

なにやら茶々丸がほほ笑んだ気がしたけど氣のせいかな

茶々丸って視力どのくらいなんだろうな・・・

「人の話を聞け貴様らーツ」

ネギが、さつきの件でイジケテル

エヴァがネギ達に魔法の方向性を言つてゐるのか

まあー当然ネギは魔法剣士だろーな

親父の事があるだろーじ

んで、また落ち込んだ

ハカセが茶々丸の音声データをプリントアウト
んー何々・・・仲間はずれとかイロイロ原因はあるな
でも

「「「「「原因はパン（だ、ダゼ、かもな、かもです、かとおもわれます）」」」」

「とりあえず謝れ、話はそれからだ」

はい、ネギが出て行つた

失敗 高畑 クウキヨメ

60時間目 カードをドロー（後書き）

オリジナル性が欲しいです

エヴァのメガネって伊達メガネなの？

さあー知りません、すみません

イロイロカットしそぎ

すみません、大抵エヴァといますから、ネギ君とは余りいません

監視は良いの？

聖夜は原作を知っていますから、何が起きるか知っています
危ない時は助けてます

原作はかいは？

殺戮とかは苦手なので、まあ一どうなるかは・・・

63時間目 観戦つて案外楽しいな（前書き）

もうひさしぶり3時間目ですか、早いものですねー

63時間目 観戦つて案外楽しいな

別荘ナウ

エヴァがネギと交戦中

「んー12秒か」

「どうした、たったの12秒だぞ」

「3対1とはいせめて1分は持たせろ」

「1Jの程度では、あの白髪の少年などには相手にもならんぞ」

「やうだねーちゅうちゅこのちゅこでヤラレチャウネ今のネギ君だと

「ひゅ~

「せりにこべぞ」ボンッ

「茶々丸ーお茶取ってくれる~」

「異まりました、聖夜さん」

「どもども」ゴクゴク

「来たれ、虚空の雷。難ぎ払え。」

「『『雷の街』』」

「ひやああ～……」

「……今のが決めとしてそれなりに、有効な 雷系の上位古代語
魔法だ」

「へえーこれがオジジョかー」

「ん？聖夜の旦那か」

「いやー始めてみたなードジョウみたいなんだな」

「ド デジョウー」

「面白こなーお前、まあこいや、この『うねね』とネギ君の修行見てるけど、まあいい感じになつたな……今のところは」

「くくく、聖夜の旦那、焼きもちやこいつるんでしゃつ」

「な・・・フン」ゲシ

オジジョを蹴り飛ばした

「（まあー）この所、ネギと練習ばつかで、俺は退屈だからな・・・
弟子にしどけばよかつた・・・」

次の日

ん、あの集団・・・ああー尾行か・・・
やかましくなるなー

あ、家に入つてつた

よし、明日香も別荘に入ったな

俺も入るか

今頃は皆、あつてるだろ？な

んで、俺も皆に会つた

「あの、Hヴァンジエリンさん、- - - (思いつかない) といつ
わけですが」

「・・・何？魔法を、私に教えろと」

「何で私が、そんなメンドくさいことを、・・・そうだ、聖夜 教えてやれ」

「ちょ、こっちは飛んできた、原作じゅ、ネギだろ・・・まあいいか

「ん、別に簡単の事ぐらいなら教えてやる、ネギ、お前あれ持つてるだろ、皆に貸してやれ」

「え？ 聖夜さん、何で知ってるんですか？」

「キニスルナ、初心者用の杖を貸してやれ」

「はあ」

「これを持つてな、” プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカツスカット）だ”」

「見てろよ、” プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカツト）” ヒュッ

ホツ

「まあ、こんなんのやるんだったら、ライターの方がいいけどな」

夕映に魔力の事を聞かれた・・・まあー知識あつたから、教えた

「つまり魔力とは 空気、水その他全て万物に宿るエネルギーとい
う」とでしょうか」メモメモ

「ああ、大体あつてる。そのエネルギーを息を吸うように体内に取
り込み・・・杖の一点に集中するイメージで・・・」

「・・・行くです」

「”プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）”」

シーン

「まあ、普通の人は何力も練習しないと、無理だから・・・」

んーみんな楽しそうだな

「プ プ プラプラクテッ」

「もう少し、肩の力を抜こうな」
のどか・・・緊張する事ないんだよ・・・

「プラクターーーー」

木乃香・・・めちゃくちゃにあやつても

別荘内で夜ナウ

「な 何してるんだろー・・・

「ふーむ アレは意識シンクロの魔法だな
「おー意識シンクロきますかー」

「う ひやいいつー?エ エヴァ エヴァ エヴァンジエリンっしゃん
!/?せ、せ、聖夜さんまで!」

エヴァが、のどかを洗脳・・・

フフフ、俺ものぞこいつと

「ガキハ落(漢字なかつた)トシ易イナ

「単純だからな・・・

「ネギ先生・・・・・ちょっとかわいそつ・・・

「ふん・・・

「ほおー」

「早ク誰力死ナネーカナ」ウキウキ

終わったか

「協力つて……そんな ダメですよ」

「聖夜さん……師匠マスターこの人達に何とか言つてあげてください——
うつ——！」

「……まあ。俺も協力してあげる……からな」 イイハナシ
ダナー

「いや……まあ私も協力してやらん事もないが」

「泣イテンノカ」

「ちよつとちよつとおそーじやなくて師匠……聖夜さーーん……！」

「んー やつと帰つたか」

「やれやれやつとういうのさーのが行つたか

「楽しそうでしたか？マスター」

「……ん……？」

「来たかー

「どうかしましたか・・・？」

「いや・・・気のせいか」

といふがつどつこい氣のせいじゃないんだよな

「エヴァー俺少し出掛けてくる」

「ん・・・別にかまわんが」

聖夜さん、傘は

いや、ちよつと空を飛んでくるだけだから、傘は邪魔で

なみ 風呂を済かせておけ！」

助かる

さて、介入しますか

「おひおひ、派手にしゃってますね」

「誰だ、貴様ハ」

「ん？先生だよ」

「桜先生」

「てめーもいんなかに入れてやる」ブン

「お断り」ガシッ

ブン

シユツ

「おひどい!!・・・四、相手はヤダナー」

「命令が終わるまで邪魔はさせないカラナー」

「フフ、相手になつてもりおひ」シユツ

バシツ、ベシツ

「甘い甘い」ガツ

んー魔法使つてもいいけど・・・すぐ決着付けるのはヤダネー

「じこ見てるのカナーバン

「おひつー」グツ

ゴボツ

ん~やつとか

「ー?」

「しまツタ

「止めレ」

「だーめ」ガシ

「くつ間に合わないデスウ」

瓶は俺が回収

「あれ？ 瓶は

「させねエゼ」

「それは俺のセリフだぜ・・・フンツ」ブン

「くう」

二人（すらむい、あめ子）は瓶入りな

「封魔の瓶」ラグーナ・シグナートリア

「いやあーんデスウー」

「また瓶の中カヨーツ」

「先生、後1人？が」

「んーわかつてゐる」

「何だ？」

「フフン、飼おつかなと思つてな」

「飼う?..」

「んー氣に入つた」

似てるところが

「素直に飼ワレルト?..」

「お前は、瓶の中に入りたいか?入りたくないだろ、なら俺と一緒に住め、やしたら封印はしない」

ふりんは暫く、頭をひねり・・・頷いた

「フフン、契約だぜ、裏切つたら、溶かしてやるかな」

「」「」「」

「んじや、瓶、俺は先に帰らせてもらひよ、決着もつこたようだしき、あ、瓶はネギにでも渡してやれ」

皆は雖然としてたが、瓶は受け取つてくれた

ふりんは俺の後ろについて来た

「んじや、行くぞ、ふりん

Hヴァの家に帰ると

「何だ、聖夜そのスライムは」

「俺のペット、飼う事にした」

「却下だ」

「却下を却下で」

「聖夜さん、タオルを」

「ん、ありがとう」

「ふりんは俺の後ろに隠れてエヴァを見てる

「大体、聖夜は私の家に居候してる身だから、私の言つこと」を聞け

「ええーんじゃ、ジャンケンで決めよつ、俺が勝つたら、ふりんは
飼う、負けたら、追い出す」

「ふりんは追い出すつて言葉にびくつとした

「いいだりつ、ジャンケンだ」

「はい、勝ちました

「ぐう、私のグーが・・・」

「マスター元気出してください」

「フフン、俺の勝ちだぜ」

「てなわけで、ふりん、おめでとう、俺と一緒に住めるぞ、ダメだ
つたら・・・まあ、買ったから良しだ」

ふりんは、ジャンプして喜んだ

結構無口なんだな・・・

63時間目 観戦つて案外楽しいな（後書き）

はい、ぷりんが仲間になりました

何故。ぷりんを生かした

聖夜は原作で、ぷりんを見て・・・ゲフンゲフン
まあーエヴァに似てるからです

ジャンケンの結果で・・・もし負けたら・・・考えてなかつた、追
い出すことはしないと思います

72 **学園祭** 学園祭・・・いい思い出が・・・(前編)

ついに学園祭辺に入りました

「2時間目 学園祭……こい思い出が……」

「学園祭か……」

「なんだ聖夜、急に」

「いやあーーー5日前だね」

「やうだな

「ハガタせびりあるの?」

「私は・・・そうだな、ネギを出でかみつと細つんだ、今の実力を測りたいからな」

ああーあれか

「やうか、茶々丸は?」

「私ですか・・・マスター達の手伝いなどをするつもりです」

「ふうーん」

「聖夜はどちらもつもつだ?」

「俺は、だらける

エヴァがグテツとした

「聖夜・・・働けえーーー！」

「ハツハツハ、ヤダ」

14日

超包子前

うつへー人気だなー・・・さすがってわけか

「あ、聖夜さん」

「よつ、つていうか大丈夫か？」

「大丈夫です、バランス機能がありますので」

「そつか、注文いいか？」

「はい」

「肉まん2つ」

「畏まりました」

「お待たせしました」

「どもども」

夜ナウ

「んー やつぱ、おいしいなー」の飯は

「聖夜」

「ん、おお、エヴァが、飲むか?俺、見青年だけぞ」

「な、お前、見青年なのに飲んでるのか」

「ん~俺、飲んでないよ。エヴァが飲むか?って聞いただけ」

「いや、お前が見青年つてのも驚いてるんだが

「子供先生がいるんだから、俺が見青年つてのもありだろ」

「そ、そつなのか・・・」

暫く

どこかで

ん?あれば、相坂かー

ネギ達・・・成仏しないぞ・・・

まあ一

「よかつたな

「よかつたな相坂さん」

「マスター達、誰に話しかけてるんですか?」

「えつ・・・

暫く

「んー茶々丸、超包子に行くぞー」

「はい、聖夜さん」

「ん? 髮縛ったのか?」

「はい」

「うん、似合つてゐじゃないか」ナデナデ

「オシャレでもしたくなつたのか?」「おつと、早く行かないとな」

「そ そづですか」

「は はい」

「うおやうお」

「おまー、やれこまー」

「よひ、ハカヤ」

「桜先生、もつ常連ですね」

「うまこから一本」

「あつい」

「四葉にも癒やされるからなー」

「ネギ老子、今日も来てるね すつかじウチの常連だ」

「あめい」

「あ?」

「あーダメだよ茶々丸ーッ」

ん? ああー、うか、あの口か一転んだら助けてやれー

おつと、ぐるか

グキッ

「あ」

ダツ

「よつと」ズザー

「あ ありがとう」「わざこまわ」

「大丈夫か、茶々丸、転ぶなんて」

「い いえ問題ありません」

「ハイ」

明日香達がキャッチした物を持ってきた

「ど どいつも」

「怪我はしないよな・・・」

ビクッ

「ちよ」

「すす すいません聖夜さん」

「つまつま、大丈夫だ」

「茶々丸、どこか調子でも悪いの？」

ハカセが茶々丸に様子を聞く

「いえ 特にシステムに異常はありません」

機械が気持ちを持つ・・・良い話だよな。皆が可笑しいとか笑いながら言つたら、全員、吹つ飛ばしてやるぜ

「ん」茶々丸

「久々にあなたをバラして点検整備したいから放課後研究室寄つてくれないかな？」

「ハ・・・了解しました」

「ん？エヴァ、帰るのか？あれ？茶々丸は？」

「点検に行つた」

「ほおー、俺も見てみたいな」

「物好きだな、行つてこい、私が許可してやろわ」

「どもども」

ダツ

「よひよひ、茶々丸ー」

「あ、聖夜さん」

「あれ？ 桜先生も来たんですか？」

「面白味」

「物好きですね、桜先生は」

「面白」と大好きですか？」

「ハカセ失礼します」「ンンン

「ん？」

「「「ひこじつ」「」」

「ほおー」

「マッドサイエンティストが出たー」

「バラされるーッ」

・・・いやいやいや

「あれー 跡をふだつしたんですかー？」

「はひや？」

バチバチバチッ！

ドカーン

「すいません・・ちょーじ実験中だったのでー」

「はあ」

どんな実験だよ・・・

「セレ ジャあ早速点検させてもいいみやー」

「ハイ」

「ハーハー ジヤあ上を脱ぎ脱ぎしましょーかー」

「えつ・・・」

「ハハハ脱ぐんですか?」

「うん?」

チラツ

ん?」机を見られた・・・あー、ネギも氣になるけどね

年頃の俺だからな、どつか向いてようかな

「ホラ早く」

「ハ ハイ」

何やり、難しい事言つてゐけど、理解できる俺が怖い

恥ずかしいねー

恋ねー

そして恋という言葉に、ハカセが壊れた・・・大丈夫か

んで、実験という事に

どんな実験だつけ、忘れた・・・

おおー

「あ あの」

「これは一体どうひつた

データ収集ねー

「あの・・・でも・・・」チラツチラツ

ん？意見でも求めてるのか？

「んー茶々丸、似合ひてるぞ、てか可愛いな」

あ、本音が出でしまった、まあ一本當だし良いか

「おおひ やはつ わざかに上昇していますーっ」

「いえ あのひ・・・」

「お次はコレですかーっ」

「あひ あの私はロボットですから、このよひな服は似合わないか
と」オロオロ

「関節部分も目立ちますし・・・」

「そんなことない『茶々丸』

「ええ カワイイですよ」

「イイネー、似合つてゐじやないか、思わず・・・」

やっぱ、鼻血が・・・

「一・?」

「う・・・、う・・・」

あ、よろけた

「お・・・! ? 素晴らしい上昇値です! ? グングンとーー! これは有効な実験数値です」

「間違いないかも」

「キヤー?」

「あつ・・ああ・・・・」

おいおい茶々丸が震えてるぞ、あー鼻血止まらないんだが・・・

ティッシュ、もらひに店内に入るか・・・

「これです・・・? -!」

ああーこのシーンか

ドンッ

腕が飛んだー

「スゴイよ 茶々丸 これはホンモノかも」

「でも驚いたな、あなたの好きな人物がまさかネ・・・」

「え…」

ざわ・・・ざわ・・・

カイジか！

つて、ああー泣いちゃった…

「ハカセのバカーツ」

うおっ。また飛んだ

「チが・・・違うンデす」

おいおい、大丈夫かマジで

ピーッ

「ちょ、暴走した」

「ええーーっ！？」

「ぼつ・・・暴走です」

「なつ・・・」

「ちちち違うんで デ です - - - つ

いや、何が？

「茶々丸さん！？」

んー俺も手伝つてやるか

よいつしょ

「オー

確か右胸だよな

あー暴れてる

「ネギ、後ろに行つて、俺前から突つ込む

「はい！」

ん、こっち向いたか

「そおい」ポチッ

「あ・・・」

「大丈夫か？」

「だ・・・大丈夫ですか茶々丸さん」

「せ・・・聖夜さん、ネギ先生」

「さて、俺は飯食いに行くかな

「え？ 桜先生」

後処理はヤダよ

俺は今回は超包子の近くで寝た

起きたら、ハカセと茶々丸が話してた

そういうえば、原作通りに、ネギの事が好きなのかな？

そして、頭の上に傘を・・・

マッドサイエンティスト・・・だな

72 時間田 學園祭・・・いい思い出が・・・(後書き)

はい、茶々丸暴走までいきました

結局、茶々丸は誰の事が好きなんでしょうか?

・・・さあー?秘密!

7・8時間目 傀略、争奪、ネギま

「ヒーマーだー」

そとを歩こてゐる、暇だから

ん?あれば・・・

「よつ、ネギ」

「あ、聖夜さん」

ん?呼び方変わったな・・・まあいいけど

「桜先生、おはよ!」^{ハレコ}まわす

「ん、おはよ、仲がいいな本当に前ひ」

「な、何言つてるんですか」

「失礼します聖夜さん、ネギ先生」

「あ・・・茶々丸さん」

「よつ、茶々丸」

「あの・・・これマスターの囲碁大会のチラシです」

「あ、どうせ」

俺はエヴァに普通に渡されたからな～

「ああの聖夜さん」

「ん?」

「あの・・・もし・・・時間があればですが・・・」「学祭期間中いつでもいいのですが・・・私・・・私と・・・」

「私と?」

「あ・・・・」

「何でもありますよ」ジン

「茶道部でおいしいお茶を貰ってお待ちしております」

「えーちゅー」

「なんだつたんだよ・・・」

「オーケイ ネギー」

「格闘大会 もう締め切るひじでー申し込み行ー」やー。

ああーそうこえば出れやんとかいつてたな、といつか出るだら勝手に

んー確か変身していくよな

ナギになるんだつけな・・・笑える

お、エヴァだ

「ナギー～お前どうして・・・」

「成程、格闘大会出る為か・・・」

「（出でせるつもりだったが）」

「（ついでにカラかつてやる）」

「よし・・・私もその格闘大会とやらに参加する事にしてやう」

「弟子の成長ぶりが気になるからな」

あー俺どじょうかなー、出でやおうかな・・・

「貴様がこの最弱状態の私に勝てなければ、学園最終日その姿で
私に一日付き合つてもらおうか」

「聖夜、お前は、私が暇な時、付き合え」

「まあいいけど、暇だし」

俺も格闘大会出るかな～適当などいひで止めるけど

「あら、桜先生、丁度良かつた、学園長先生が明日来てほしいって

「ん？学園長室か？」

「いえ、早朝に世界樹前広場に来てほしつて

「判りました」

次の日ナウ

「んーなんだつけなー」

あ、ネギと刹那だ

「おーい、ネギと刹那ー」

「あ、聖夜さん」

「桜先生」

「俺も、学園長に呼ばれたんだ」

「何の話でしようかね?」

「さあー俺もわからん」

「あれ?おかしいな・・・」

「ん?」

「どうかしました?」

「学祭前日なのに広場に人が一人もいないなんて」

「あれ・・・」

「あれは・・・?」

「お・・・ネギ君と聖夜君」

「待つとつたゞ」

「へ」

ああーあれかーネギが驚いてる

「あ あのーこの方たちは

「つむ、ネギ君と聖夜君には、まだ紹介していなかつたの」

魔法先生達でしょ知つてます

「君が聖夜君か」

「ども」

「いとこちは、聖夜君」

「どもども」

「はー広い学園内に、こんなに魔法使いの人たちがいたなんて」

「世界樹伝説をしつとるかの」

「知つてます、願がかなうとか」

「それがの一真実なんじゃマジで願いが叶つてしまつんじゃよ」

「22年に一度じやがな」

「ヘーヒヴア達と告白でもしけりつかなー、冗談だけど

「告白に関する限り、その成就率は120%!!!! まさに呪い級の威力じやよ」

「いろんな話ををしてて

「誰かに見られてます」

グラサンが

パチン

ボヒュッ

無詠唱呪文か・・・

といふか、相坂・・・なにしてるんだよ

あ、ロボットの方にあたつた

追手が行つた

「以上解散」

告白ねー俺はいないけど、フラグ立てれてないし

ネギ問題ありまくり

俺は傍観してるけどね、暫く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8464y/>

魔法使い聖夜！

2011年11月26日15時50分発行